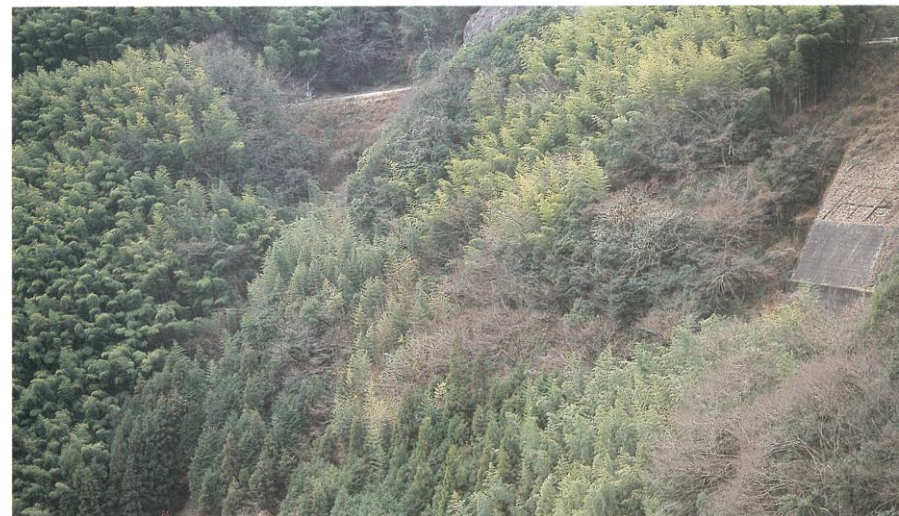




タケが侵入した雑木林の林内。すでにタケの方が優占している。



スギ植林や雑木林に生育地を拡大する竹林。(写真はいずれも石手川上流)

樹の低木の生長を阻止する。また地中浅くに網目状に根を張るので、同じく根張りの浅いスギやヒノキなどとは根系の競争となり、スギやヒノキの植林も次第に衰退することになる。

竹林拡大の背景として竹林の荒廃が挙げられている。確かに国産タケノコの価格低迷、竹材の需要低下、生産者の高齢化などにより、多くの竹林が放置され、林内では竹が密生してい



手入れの行き届いた竹林（右半分）と放置された竹林（左半分）。

まつい・ひろみつ 松山東雲短期大学教授。専門は植物社会学、環境教育。昨年、「四国樹木観察図鑑」など三冊の出版に携わり、出版物は一区切りがついた。五〇歳になり、残された時間と体力を勘案して、今後の研究課題を再検討中。一方ではのんびりと温泉や野辺歩きにも魅力を感じている。

る。地下茎が外へ広がるのは、竹林内が過密で栄養不足になったためという説があるが、周囲の林への侵入は竹林の荒廃が最大の原因ではない。

竹が地下茎を伸長して周囲に新しい株を出すのは、過密状態とは関係なく生態的にごく普通の現象であり、竹にしてみれば当然の営みである。里山が薪炭林として経済的価値があった頃は、里山の管理をする立場の人間が侵入したタケノコを除去していたのだ。地上に顔を出したタケノコを蹴って折るだけで竹の侵入は阻止できる。人々が里山に関心を持たなくなったときに竹林の侵入が始まったにすぎない。

現在、やっとボランティアの参加によって里山の維持管理の動きが各地で開始されている。一方では竹林を再生させる動きも始まり、竹炭や竹和紙など新しい用途も開発されている。もともと竹林も里山の一部であるから当然の成り行きである。



木と人間 11

雑木林に侵入する竹林

松山東雲短期大学

松井 宏光

Hiromitsu Matsui

竹は古来から重要な素材であった。強靱でしなやかで、細長く割れて、水にも強いという特性を利用して様々な用途が考案された。竿、箆、籠など日用品、土壁の下地となる木舞など建築材のほか、茶道や華道の道具など工芸品などにも使われた。また筍は季節感あふれる食材として、竹皮は包装材料として使用された。

普通、竹林を形成する竹は、モウソウチク、マダケ、ハチクの三種類であり、このうちもつとも広い面積を占めるのはモウソウチクである。モウソウチクは今から二〇〇〜三〇〇年前に中国大陸から伝わったもので、よほど日本の暖地が生育に適しているのか、いまや里山の各地に分布している。

しかし現在、竹林が里山や植林を破壊する恐るべき植物として問題視され始めている。竹林がその面積を拡大し、周囲の雑木林やスギ・ヒノキ植林を駆逐しつつあるというのだ。竹の地下茎は一年間で五〜六メートルも伸びる。周囲のコナラ林やスギ植林の地中に侵入した地下茎は、母竹から養分を提供されて、暗い林内でもすくすく根を伸長して、数ヶ月で高さ一〇メートルを超えるまでに生長する。こうして瞬く間に地上高くに葉を展開し、広葉